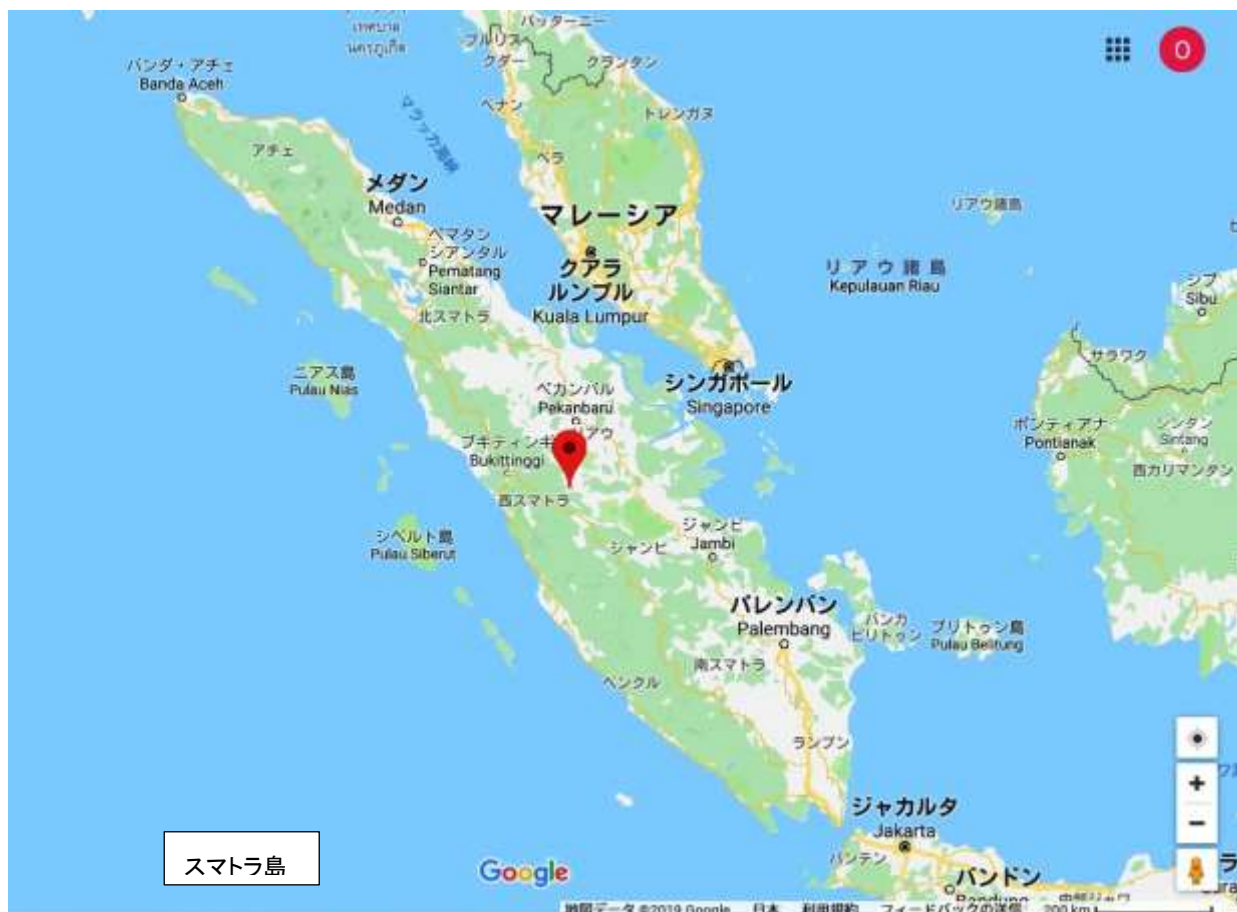


## B-1 スマトラ島

## 081. スマトラ島の地形



全世界の島の大きさで世界第1位はグリーンランドである。第2位はニューギニア(イリアン)島、第3位はボルネオ(カリマンタン)島、第6位がスマトラ島である。2、3位ともインドネシアであるが、他国と共有であるため、スマトラ(Sumatera)島<sup>1</sup>はインドネシアが単独で有する最大の島である。

スマトラ島の面積は47万平方kmであり、日本の総面積(37万平方km)の1.3倍になる。インドネシアの陸地面積の25%を占める。

島の西側を脊梁山脈のバリサン(Barisan)山脈が貫いている。長さは1600kmで、海を経てヒマラヤ山脈に連なる山系であり、最北のアチェ州で最も峻険である。バリサン山脈はインド洋側に有り、断崖となって海に臨んでいる個所もある。総じて西側は平地は少なく東側は低地になって広がる。スマトラの主要な川はバリサン山脈に発してジャワ海へと西から東に島を横断して流れる。最長のバタン・ハリ河は800kmある。

プレートテクトニクス(→016)によればユーラシア・プレート上にスマトラ島を含む大スンダ列島がある。インド・プレートがユーラシア・プレートの下に潜り込んだ結果、生じた皺の盛り上がった

<sup>1</sup> スマトラ島のインドネシア語表記は「Sumatera」であり、慣用されている「Sumatra」は外国語表記である。

部分がバリサン山脈である。皺の下がった部分がスマトラ島とジャワ島の沖に並行する<sup>かいこう</sup>海溝である。特にジャワ海溝（最深 7045m）は深い。ちなみにインド・プレートはインド洋とインド亜大陸が乗っており、インド亜大陸を北へ押し上げてヒマラヤ山脈を作り、なおかつ現在も造山活動が続いている。

インド・プレートのスマトラ島への圧力は北側に強いいためスマトラ島は 400 万年前からジャワ島に対して 10-5 度/100 万年の割合で時計周りに回転している。その結果、列島が折れたような形でスンダ海峡(→037)ができ、その裂け目にマグマが浸透してきてクラカタウ山(→021)が噴き出した。

プレートの動きに生じた<sup>しかん</sup>弛緩の溝がスマトラ島を縦断する大断層である。幅 15km のセマンカ地溝<sup>2</sup>がバリサン山脈に並行している。地溝の痕跡を地図で追うと南端はランプン州のU型の湾であり、北はアラス溪谷まで辿れる。

地溝の裂け目に地下のマグマが集積して火山帯となっている。スマトラ島には約 90 の火山が連なり、15 が現役である。タワル山、レンブ山、シバヤク山、マラピ山、クリンチ山、スンビン山、スブラット山、デンポ山が有名である。この火山帯は環太平洋火山帯の鎖の延長である。

爆発の盛んな火山はアチェ州のピュエトサゲエ（Peut Sague）山とカバ（Kaba）山である。タワル湖、トバ湖、マニンジャウ湖、シンカラック湖、クリンチ湖、ラナウ湖(→027)のカルデラ湖は地溝に生じた火山の痕跡である。

## 082. スマトラ島の人文地理

島の中央を赤道が横断する。熱帯雨林気候が山岳地帯を除く全島を覆っており、人口密度は低い。人の居住地は分散しているためスマトラ島の民族の構成は複雑多岐であり言語、宗教、習慣など文化が異なる。

アチェ人(→604)、ミナンカバウ人(→609)、マレー人(→605)、バタック人(→607)が主力民族であり、その他にランプン族、ルジャン(Rejang)族、クリンチ族、アブン(Abung)族、アラス族、ガヨ族、ニアス族などが適当に割拠している。

沿岸の都市部には近世になって移住してきた中国系、アラブ系、インド系の外来住民も居住しており、南部にはジャワ人の集団移住地(→724)もみられる。

スマトラ島の地理的位置は東西交通の要衝の地に当たるため、初めはインド文化の影響が大きく、ヒンドゥー教と仏教が優勢となり、7世紀にはパレンバンを都としたスリウィジャヤ王国(→255)が栄えた。14世紀ころから東進してきたイスラム勢力は、アチェ人を改宗させてイスラム王国(→257)をつくり、たちまちのうちに全島に拡がった。山岳部のバタック人だけはイスラム教になびかなかった。

8世紀頃、スリウィジャヤ王国がスマトラ全島に覇権を唱えたが、その後は各地に王国が割拠した。スマトラ島が再び一つの統一政権の下に置かれたのはオランダ領東インド(→279)としてオランダがスマトラ全島の宗主権を確保してからである。

植民地からの解放を目指す民族主義運動が盛り上がってきた時にミナンカバウ人のムハマッド・ヤミン(→296)は『アンダラス (Andalas) 希望の島』という詩を書いた。アンダラス<sup>3</sup>とはスマトラ島の古称である。1922年当時はジャワ島への対抗意識からアンダラスを讃えた詩人は1928年の第2回

<sup>2</sup> セマンカ地溝(fault)は書籍によりスマトラ地溝と記載されている。

<sup>3</sup> <編者註>「桑」という意味らしい。

青年の会議(→292)に際しては『インドネシア・わが祖国』という詩を書き、アンダラスは祖国インドネシアに昇華した。

スマトラ島は多くの民族主義者を輩出しインドネシア独立に導いた。スマトラ出身者の活躍なくしてはインドネシア独立の歴史は語れない。疾風怒濤時代に多くの人材を輩出したスマトラ島であるが、現在はスマトラ人の影がうすいような気がしてならない。

スマトラの地名の由来には諸説がある。①スマトラ島北部の港町サムドゥラ<sup>4</sup>(→256)(Samudra 蘇門答刺)が島全体を指すようになった。②サンスクリット語に語源を求めると「su (良い)」「matra (計測する)」になる。あるいは samantara (境界、中間) はアジアに向かう途中の地点の意味かもしれない。③同じくサンスクリット語の Sumatrabhumi (金州、金地) ともいう。ラーマヤナに“金の島 (Svarnadvipa)” と記されており、スマトラ島は金の産地として知られていた。

語源はとにかくとして「samatra」はポルトガル語で「突然の嵐」という意味らしい。スマトラのスコールは激しいことで知られている。ちなみにマラッカ海峡航行の船舶は激しいスコールのことをスマトラン・ストームとして畏怖している。

### 083. アチェ/西の正門

スマトラ島の最北端の「アチェ (Aceh)」はインドネシアの最西端になる。しかし、インドネシアにおけるアチェの位置はインドネシアの辺境ではない。むしろ西からの文化の入口にあたり仏教、ヒンドゥー教、イスラム教あるいはヨーロッパ文化、これらすべてはアチェ経由でインドネシアに導入されたものである。

特にアチェは王国時代より東南アジア・イスラム世界の拠点であった。イスラムによる文化的発展も著しく、近隣イスラム諸国の教学研究の中心的存在として多くのウラマ(→870)を集めた。東南アジアのイスラム教徒にとってアチェは“メッカのベランダ”といわれ、かつてはメッカ巡礼(→816)船の出る港であった。

スマトラ島北端の州都バンダ・アチェ (Banda Aceh) は古くから胡椒の出荷地であり交易で発展したアチェ川河口の港町である。16世紀以降、アチェ王国の王都として知られていた。マラッカ王国(→032)が17世紀にはポルトガルに占領され、後にオランダ・イギリスとヨーロッパ勢力の下にあったために、アチェはマラッカに替わりイスラム・チャンネルの交易で賑わった。

しかし18世紀には胡椒貿易の衰退と共にバンダ・アチェ港の繁栄も失われた。1874年バンダ・アチェはオランダに占領されて以降、アチェ地方侵略と支配の根拠地とされた。オランダはクタ・ラジャを公式名称としたが、独立後バンダ・アチェの名に復した。

現在のバンダ・アチェの河口港は機能を失い、地方の農産物集散の人口10万強の田舎都市である。しかし州都としての行政機関、博物館がこの都市の偉大な歴史を物語る。

町の中央にあるバイトゥルラーマン (Baitur rahman) 大モスクはアチェ人のイスラム信仰の象徴であり、インドネシアで最も素晴らしいといわれる。しかしこのモスクを建てたのはオランダである。

<sup>4</sup> <編者註>現在のロクスマウェ付近に強大なアチェ王国があり、その名をサムドゥラ・パサイ王国であった。このサムドゥラが訛ってスマトラの名になったと歴史家 Slamet Muljana 教授はのべている。

アチェ戦争で苦戦したオランダが住民懐柔のために建てたものである。

今日のアチェ州は稲作を行う農業地域である。古い歴史を有するマラッカ海峡に面した平野部が水田の適地であり人口も多い。東海岸は歴史に登場する古い港町が並ぶ。プルラク (Peureulak) は13世紀に最初のイスラム教国が建てられた。サムドゥラ・パサイ(→256)はマルコポーロが中国からの帰路に風待ちのため5ヶ月滞在した所である。アチェ王国の前身である。

ロクスマウエのコンビナート  
2018/5/24 (IW1250 上から)



田園風景の中に超現代的なガス・コンビナートがある。ロクスマウエ (Lhokseumawe) の近くのアルン(Arun)に日本への輸出用LNG工場(→548)とASEANの肥料工場(→539)が操業している。しかしこれらの開発がもたらす富はジャカルタに吸い上げられ、アチェの富が収奪されているとして中央に対する

不信感が強い。誇り高きアチェはインドネシアからの分離独立問題を提起しており、D-6章(国家分裂の危機)に詳述している。

2004年12月のスマトラ沖地震(→028ex)の津波による被害の惨状は記憶に新しいところである。  
⇒257.アチェ王国、281.アチェ戦争、604.アチェ人

#### 084. 先端のサバン

アチェの北端の先のウェ (Weh) 島という小島に「サバン (Sabang)」の町がある。古い火山島で奇岩など風景はすばらしいが、アチェ王国時代は流刑地であった。バンダ・アチェから約2時間のフェリーが就航している。

インドネシアの広い国土をいう時「サバンからムラウケまで (Dari Sabang sampai Merauke)」という。メラウケ(→242)はイリアン (パプア) 州南岸の最東端である。このようにサバンの地名はインドネシア国土の象徴的な意味を持つことから、インドネシア独立運動において民族主義者の胸中の襞ひだに訴える地名であった。

植民地時代にオランダへ留学したインドネシア人の民族主義者が帰航にあたり最初に目にするなつかしの祖国がサバンであった。その感激は次のように述べられている。

「ついにサバン、インドネシアだ。海岸に沿った小高い山から見る日没はまことに素晴らしいものだ。いよいよ航海も終点に達したのだ」(タンマラカ(→295)自伝)

サバンはマラッカ海峡の入口として戦略的にも重要な地点である。帆船から汽船への変遷にオランダは貧しい漁村であったサバン港に目をつけた。セイロン (スリランカ) 島のコロンボとシンガポールの中に位置する石炭の補給基地としてである。オランダは石炭の補給のためスマトラ島に炭坑を開鉱した。サバンには水の補給のための設備やドックも造った。マラッカ海峡の入口を固める要

塞も築いた。

かつての汽船時代のサバン港は石炭の補給地としてマラッカ海峡の南端のシンガポールと肩を並べる存在であった。今日のシンガポールは世界の十字路口として狭いながらも都市国家として繁栄を誇る。一方、現在のサバン港は石炭倉庫の面影を留める古い建物が残っているだけの時代の波に取り残された町にすぎない。この差の生じる所以は立地条件の差だけではなく、政治の問題もあろう。

1970年にサバンを自由貿易港とし貿易の振興を図り、賭博の解禁も試みられてサバン港は一時的に賑わった。しかしバタム島(→534)優先の政府措置のため自由貿易港は1986年に期限切れとなり、サバンは再びうら寂しい田舎町に戻った。アチェ州の振興についてジャカルタが本気でない証拠としてサバン港の衰退があげられてきた。アチェ独立問題(→437)への対応として、ワヒド大統領によってサバンは再び自由港になった。

第二次世界大戦で島を占領した日本軍はインド洋から攻めてくる連合軍に備えてオランダの築いた要塞を強化した。島の大きさの割に駐屯した日本兵の数が多く過剰警備と食料不足から発生した<sup>あつれき</sup>軋轢の後遺症があり、かなりの間は日本人には行きにくい雰囲気があったといわれていた。

今、サバンで最も期待されているのは観光である。古い火山島であるため海底の変化がすばらしい。スポットはイボ (Iboih) 海岸の対岸のルビア (Rubiah) 島である。

## 085. アラス溪谷

アチェの内陸部はスマトラ島の背骨であるバリサン山脈が海に没する前の褶曲を全部ここで引受たような険しい山岳地帯である。3千<sup>メートル</sup>をこえる山並みの狭間<sup>はざま</sup>にガヨ (Gayo) 高原とカルデラのタワル (Tawar) 湖がある。



ガヨ高原とタワル湖  
2010/11/25

ガヨ高原を根拠地とするガヨ族はバタック人(→607)の支族であり、アチェ人とは別の民族であるが、アチェ人の影響を受けてイスラム教に改宗した。20世紀初めは1週間の徒歩旅行でようやく辿り着けるような秘境であったが、現在ではスマトラ縦貫道路(→845)の開通により数時間のドライブである。秘境であったガヨへアチェ人、ジャワ人、ミナンカバウ人、華人などが移住してきたためガヨ族は少数派になりつつある。

ガヨ高原とカロ高原を結ぶ「アラス (Alas) 溪谷」はスマトラ (セマンガ) 断層の末端である。アラス溪谷にはアラス族が居住しており、ガヨ族と同様にバタック人系であるが、アチェから浸透してきたイスラム教に改宗している。ここでも交通の便がよくなり、他民族の流入でアラス固有の文化が滅亡の危機にある。

30年戦争といわれたアチェ戦争(→281)の末期にはアチェ反乱軍はオランダ軍に平地からガヨ高原・アラス溪谷へと追いつめられた。複雑な地形による隠れ里の存在が、ゲリラ戦による長期抵抗を可能にした。

アチェ戦争末期の指導者のチュッ・ニャ・ディン(→341)はアチェ人である。世故たけたアチェ人の大勢が既にオランダに帰順していた際にアチェ戦争末期の戦いをジハード(聖戦)の兵士として支えたのは山間のガヨ族やアラス族などの朴訥<sup>ぼくとつ</sup>な部族である。彼らはアチェ人以上にアチェ的であった。太平洋戦争の沖縄戦における沖縄の人を思い出した。

アラス溪谷のブランケジェレン(Blangejeren)は女子供を含めた村人が皆殺しにされた所である。転がる死屍累々<sup>ししるい</sup>を舞台装置の小道具にしたオタンダの戦闘勝利記念写真はヨーロッパでも轟々たる非難をあびた。オランダはその跡に砦<sup>とりで</sup>を築いたが、兵士は死者の亡霊に夜な夜な<sup>おび</sup>怯えたという。

ルセール(Leuser)山(3466m)は非火山でアチェ州の南部にある。険しい山中はオランウータン(→071)やスマトラ虎(→067)やスマトラ犀(→069)やスマトラ象(→068)が生息している密林である。ルセール山からアラス溪谷にかけて国立公園に指定され、大型哺乳類や鳥類が保護されている。

人跡未踏地には動物のみならず未だ文明に接したことの無い短身の未開部族がいるという風説もあった。昔の話であるが、オランウータンの毛を全部剃って新人類の発見と売り込んだ詐欺師がいたそうである。

ルセール山国立公園の所在地は北スマトラ州とアチェ州にまたがるが、メダンから入るのが便利である。公園内のブキット・ラワン(Bukit Lawang)ではオランウータン孤児の野生復帰のリハビリが行われている。

## 086. カロ高原

トバ湖北方に広がる「カロ(Karo)高原」はシバヤク(Sibayak 2094m)山、シナブング(Sinabung 2451m)山の活火山に囲まれた土壌の豊かな高原である。カロ・バタック族(→607)30万人が農業に従事している。キャベツやジャガイモなどの高原野菜はベラワン港よりシンガポールやマレーシアにも輸出される。

カロ高原中心地にあるブラスタギ(Berastagi)は1330mの高地にあり年平均気温20℃と冷涼な気候であり果物の町である。ゴルフ場やキリスト教各宗派の教会がある。避暑客が馬に乗って遊んでいる。丹精をこめた花壇を爽やかな風が駆け抜ける。

ブラスタギの町の起源は1912年、メダン在住のオランダ人のためのジャガイモ栽培が成功したことから、植民地時代にメダンの避暑地のみならずシンガポールやマレー半島の欧米人の高原の保養地として開発された。

リゾートホテルが建設され、当時の小説によると金と閑を持て余したプランターの若い人妻が不倫にふける舞台<sup>5</sup>であった。今日も年配のヨーロッパ人客が多いのは植民地時代への“センチメンタル・ジャーニー”であろう。

私が遭遇したブラスタギでの小さな事件はスハルト全盛の頃であった。メダンから乗車していたハイヤーが高台のホテルに向っている際に、どこからか続々と現れた高級車に取り囲まれるようにしてホテルに到着した。ホテルに入りロビーには満艦飾<sup>まんかんしよく</sup>の勲章をつけた年輩の高級軍人が着飾った

<sup>5</sup> Madelon Lulofs (translated from the Dutch) "Rubber" 1988 Oxford University Press  
小説の概要は別項目(→972)で紹介。

夫人を連れて<sup>たむろ</sup>していた。どうやら高級軍人OBの集会に来合わせたことが分かった。

思い出すにあの時の我方の車の運転手の顔は緊張で強張<sup>こわば</sup>っていた。運転手にしてみれば神戸で暴力団組長の葬式の列に紛れ込んだのと同じ恐怖感であったのであろう。ちなみにインドネシアでは車のナンバープレートで軍関係の車は識別できる。

軍人連中は夫人を連れて上機嫌で友人との再会を喜び合っていた。將軍達の堂々と肥満した体軀は痩せた一般のインドネシア人とは別人種のように見えた。

ホテルは板張りの天井の高い戦前を思わせる様式であった。箱根の“富士屋ホテル”に入った時にブラスタギのホテルを思い出した。

バタック人の中でカロ族は最も伝統的な文化を伝えている。リングア (Lingga) 村ではカロ・バタックの伝統様式の反り屋根の伝統民家(→939)があり、トバ湖へ行く観光客が立ち寄る観光地となっている。ガイドの案内するままに伝統民家の階段を上って暗い室内に入った。囲炉裏<sup>いろり</sup>の火が見えるだけで誰もいないかと思ったら、次第に目がなれてすぐ側の足元に老婆がうずくまっていたので驚いた。

大人は農作業に出かけているようだった。村には子供が遊んでいたが観光客が来ても無関心であった。インドネシアすべての観光地では物売りの攻勢にたじたじとなるはずであるが、カロ族のあの村は一体何であったのかと今でも気になる。

## 087. カルデラのトバ湖

メダンから延々と登り坂を上り詰め、外輪山の峠から眼下の大火口原に広がる水色の湖面の景色は感動的であった。スマトラ島北部の標高 900m にある「トバ (Toba) 湖」は琵琶湖の二倍もある世界最大のカルデラ湖である。サモシル (Samosir) 島を入れると 1740 k m<sup>2</sup>で琵琶湖の3倍になる。水深 529m である。トバ湖集水面積 3440 k m<sup>2</sup>には 30 万人が居住している。

巨大なトバ湖を作った大爆発<sup>6</sup>の規模はクラカタウ火山(→021)の 100 倍といわれる。複合火山の中央になるサモシル島は温泉の滝などに火山活動の症状が残っている。荒々しい不毛の山であるが、全バタック人の心の故郷であり死者の魂の宿る所である。

バタック人の伝説ではかつてドロク・リヒトという高山があった。バルー・サニアン・ナガという女神が人間の男に騙された時に、怒りで火山が噴出してリヒト山が揺れ動き、嵐で溪谷が浸水して湖になった。住民は今も湖を司る女神を“竜”として恐れ、船頭は湖に供物を捧げてから出航する。

湖岸にあるサモシル島の名所は船でめぐる。アンバリタ (Ambarita) 村には石の椅子が円形にあり、そこで裁判が行われた。近くにある石のまな板は処刑を行う首切台である。首を切られた遺体はその場で食(→608)べられた。

トモク (Tomok) の王家の墓にあるワリングン(→050)の樹の下にシダルブタ (Sidarbuta) 王の立派な石棺がある。石棺には王の彫像と王妃と護衛の彫刻がついている。400 年前といわれるが、彫像の印象は現代の美術をも思わせる。石棺の形のそり具合が船であることは興味深い。

船に乗ってあの世に行くというのはバタック人に限らずインドネシア文化の基層にあるらしい。

<sup>6</sup> 75,000 年前の大爆発の噴出物の体積は 2000 km<sup>3</sup>といわれ、スリランカ島に降灰の地層がある。灰層は 600m に達し、火山灰などの堆積物のため北スマトラの生物は全滅したといわれる。マレーシアでは灰層の下から石器時代の遺物が発見された。

古代エジプト文化との共通点を指摘するユニークな説<sup>7</sup>がある。

湖岸の小さな村のバタックの伝統家屋(→938)や瀟洒な保養施設が湖の風景に溶け込んでいる。湖畔のプラパット (Prapat) は保養避暑地としてメダンやシンガポールの熱帯の低地から涼を求める白人によって植民地時代に拓かれた。1949年1月、独立戦争の最中にオランダに逮捕(→327)されたスカルノ大統領はプラパットに軟禁されたことがある。

インドネシアの観光地としてバリ島、ジョグジャカルタに続いてトバ湖に人気が高いのは避暑地としての高地の爽やかな気候とスケールの大きな風光明媚な火山地形であるが、それ以外にバタック人の作り出した個性強い文化の存在が大きい。

観光客は伝統家屋やシガレガレ人形(→919)の特異な文化に触れ、夜はホテルで声量のあるバタック人の歌謡と器楽演奏を楽しむ。土産物にはウロス (ulos) というバタックの手織り布、カチャビー (kacapi) というギター等がある。

手作り民芸品のバタックのカレンダーは1年分の記号が並んでいる。解説書によると種を蒔く日、休息の日など数種の記号が繰り返し現れる。

⇒027.カルデラ湖

## 088. デリ/新開地

17世紀、マレー人(→605)の領主がデリ川の24km上流のメダンに居を構えて「デリ (Deli)」のスルタンと名乗った。デリとはデリスルダン (Deli Serdang) 県の地域であるが、広義には北スマトラ州の東海岸地域一帯を指す。デリ地方はオランダ植民地時代にプランテーション(→505)で飛躍的に発展し今日も重要な地域である。インドネシア有数の大都市になったメダンはその中心である。

1863年オランダ人のニーンハイスがタバコ農園を始めて以来、同地のタバコは葉巻に優れており、デリの名は煙草の産地として世界に知られるようになった。さらにタバコに加えてゴム(→561)のプランテーションが発展した。

内陸部の丘陵地帯に広がる土地はほぼ無人であるから入手は容易である、資本はヨーロッパ・アメリカから調達できる、問題は労働力であった。もともとこの地方は沿岸にマレー人(→605)の村が点在する程度の人口の希薄な地域であった。

同じ事情にあったデリ対岸のマレー半島では英国植民地であったため中国とインドに労働力が求められた。これに対してオランダには自領の植民地にジャワ島という人口過剰の地域があった。スマトラ島では島内各地に加え華僑労働力にも依存してきたが、ジャワ人、スンダ人等のオランダ領内からの移住者が多かった。

マデロン・ルーロスヌフ著(→972)の『クーリー (Coolie)』はジャワ島出身のクーリーの生涯を描いた小説である。だまされてスマトラ島に連れてこられ、初めは出稼ぎのつもりであったが生涯ジャワへ帰ることができず、結局はスマトラの土となる一生である。

このように急速に発展したメダンには世界各地から集まった人種が見られた。新開地の常としてがさつであり、悪名高い“メダン華僑<sup>8</sup>”が跳梁した。

<sup>7</sup> トバの語源は古代エジプト語の toiba (美しい水) であり、その他にもバタック文化に古代エジプト文化との共通性がある。⇒リー・クーンチョイ著「インドネシアの民俗」

<sup>8</sup> スマトラ島の華僑はクーリーの客家、広東省出身者が多く、福建省の多いジャワ島と比べると気質が荒かった。ジャカルタで



一方では伝統社会の規範がないことから自由な雰囲気には溢れていた。インドネシア独立を主張する民族主義者が活躍した。後に副大統領となったアダム・マリク(→447)はメダンで論陣をはっていた。

太平洋戦争後、植民地体制は崩壊したが、マレー半島は中国人とインド人が人口の半数近くを占めていたため複合社会(→686)のまともりの悪さを露呈した。これに対してスマトラ島のデリでは同じ労働移民であってもインドネシア人として結束が可能であった。

しかし一方では労働者として支配階級に対して階級意識が先鋭化していた。トゥビン・ティンギで日本軍との武器争奪戦(→323)があり、またスルタンが処刑されるという事件もあり、デリなどスマトラの新開地は荒々しい歴史を経ている。

メダン国際空港はポローニャ (Polonia) 空港という<sup>9</sup>。語源はポーランド人の経営する農園であった事にちなむ。インドネシアの国際空港は国家英雄の人名であるが、どういうわけかメダンだけは例外である。

マラッカ海峡に面する外港ベラワン (Belawan) はデリ地方の物産の輸出港である。植民地時代にはヨーロッパ向けの客船が就航する華やかな港であった。

## 089. メダン市

スマトラ島北部の「メダン (Medan)」は人口 190 万人(2000 年)、スマトラ島最大の都市であり、インドネシアでも 4 番目の都市である。インドネシアで経済的に重要な北スマトラ州の州都である。メダンは“広場”という意味であり、かつてアチェ王国とデリ王国の間で戦いの行われた広場であることにちなむ。

メダンは今世紀になってゴムのプランテーション(→505)などスマトラ島の資源開発とともに急速に発展したもので、植民地時代に東インド政庁のスマトラ島支配の拠点となった。オランダ植民地時代のメダンは急成長の新開地として、アメリカ西部劇の新開地さながらのガラの悪い町で評判はよくなかった。世界各地からあらゆる民族の移住してきた町で“人種の博覧会場”のようであった。

独立後、欧米人は姿を消したが、コスモポリタンの性格は引き継がれ地元のマレー人(→605)に加え、バタック人(→607)などインドネシア各地からの移住民で構成されている。

インドネシアの大都市で地域の民族伝統から束縛されない二つの大都市があるといわれる。すなわち始めから終わりまでインドネシア語が話される都市である。一つは首都ジャカルタでもう一つがメダンである。その他のスラバヤ、バンドゥン、ウジュンパンダンの都市ではインドネシア語の挨拶が終わると会話は地方語になる。

メダンの都心にはプランテーション・ブームの時代に金をあかして建てられたコロニアル風の瀟洒な建物の町並みと鬱蒼と茂った街路樹の風景が残っている。自動車やバイクの喧騒さえなければ 1930 年代へのタイム・スリップである。かつて日曜日に訪れた際のチャイナタンの妙な静寂さが印象的であった。

独立後もメダンは発展し人口は増加し続けた。周辺部に行くほど無計画に拡大しゴチャゴチャとしている。スハルト政権末期のメダン暴動では華人の商店や工場が襲われた。

揉め事があるとメダンの華僑が駆けつけた。アントン・メダンの悪名で知られていた。

<sup>9</sup> <編者註>2013 年 7 月 25 日に民間航空はクアラナム空港へ移転した。



メダンのマイムン宮殿  
2015/6/08

メダン市内の観光スポットとしてかつてのスルタンの宮殿が公開されている。立派な建物に比較して展示品はありきたりである。スルタンの直系はジャカルタで議員ということである。独立後の北スマトラを襲った革命運動で各地のスルタン家は処刑されたが、どういわけかデリ（メダン）のスルタンは免れたらしい。

宮殿の裏手に廻ると目立たない一画に人が居住している様子が窺われた。後で調べるとサルタンの支族ということであるが、洗濯物などの雰囲気は庶民のものであった。

メダンの数少ない名所の一つはワニ(→078)の養殖場である。餌に与えられた生きた鶏をワニの群れが争い求める。日本から視察にきたどこかの市長が噛み付かれたことがある。見ていて気持ちが悪くなるだけである。ワニ皮のお土産目的ならとにかく好き好んで行く所ではない。

アサハン川の水力発電所建設(→542)工事当時は日本人駐在員も多く、日本料理店も繁盛したが、工事終了後は店じまいした。

## 090. カンパル河流域

古代スマトラ島に栄えたスリウィジャヤ王国(→255)は王国所在地のパレンバンやジャンビから仏像などが発掘されているが、大帝国にしては遺跡が少ないのはスマトラ島の厳しい自然下で土に還元されたからであろうか。

数少ないスリウィジャヤ王国時代のスマトラ島にある遺跡は、①北スマトラのパダン・ラウス、②中央スマトラのムアラ・タクス、③ムアラ・ジャンビである。

- ① の北スマトラ州のパダン・ラウス (Padang Lawas) はバルムン川の上流である。広々とした草原に 16 の遺跡が残っている。ほとんどが煉瓦積みのため崩れそうになっており、インドネシア考古学当局によって修復作業が行われている。碑文から 11~14 世紀に密教信仰のセンターであったことがうかがわれる。③ムアラ・ジャンビはジャンビ州の項にゆずる。

スマトラ島の古代遺跡の中で最も保存のよい②のムアラ・タクス (Muara Takus) は「リアウ州カンパル (Kampar) 河」にある。11~12世紀のヒンドゥー遺跡であるが、9世紀頃から建てられたらしい。74m四方の砂岩壁で囲まれており、かつては都市の一部を形成していた。基盤が砂岩で上部は煉瓦作りのため損傷が激しく、6個のチャンディのうちマリガイ (Mahligai) 仏塔1個のみが残る。<sup>10</sup>

<sup>10</sup> <編者註>2012/2/22 に訪問した時にはほぼ修復が終わっていた。



ムアラタクス  
2012/2/22

次はカンパル河の古代から一足飛びに現代の話題である。カンパル河のコトパンジャン・ダム<sup>11</sup>は高さ 58 ㍎、有効貯水容量 10 億トン、発電容量 11 万 kw の電源開発と灌漑のプロジェクトである。資金は 2.5 億ドル（当時のレートで 340 億円）であり、標高 900 ㍎の高地に広がるリアウ州と西スマトラ州で 14 村、1.5 万人の農民の移住を余儀なくされた。

一般にインドネシアのダム・プロジェクトは世界銀行プロジェクトで工事施工は日本企業というケースが多いが、コトパンジャン・ダムは初めの調査段階から日本の ODA プロジェクトであった。

ダム建設はインドネシア各地で水没地の住民から反対運動を受けているが、コトパンジャン・ダムについてはインドネシア政府側の対応に見切りをつけた反対派の農民はジャカルタの日本大使館に工事取りやめの直訴<sup>じきそ</sup>を行い、日本へも代表を送ってきた。

日本側の再調査によってもスマトラ象(→066)の生息地という自然環境問題も提起された。ODA のため地元の農民や自然環境が脅かされているとの批判が高まり、日本側は住民の同意を得ること、象のための移転地の確保などを ODA の条件とした。

反対派の意見を考慮した日本の条件であるが、インドネシア政府からは主権を侵害するものだという反発を引き起こす。日本としてはインドネシア政府と農民/環境論者の間のジレンマの中で ODA そのものの在り方が問われている。ハザマ(株)を施工者として 1993 年着工した。

交通不便な場所のため放置されていたムアラ・タクスの仏教遺跡も水に浸かるらしい。このため、盛り土をして貯水池の浮かぶ遺跡として観光地にする計画である。

## 091. プカン・バル市

スマトラ島の東側の 2/3 は地図では緑で表示されている平地であるが、熱帯の平地とはジャングルに覆われたスワンプ(→007)で人の居住を排斥する所である。そのスマトラ島中央部東側のリアウ(Riau) 州は日本の本州の半分近くの大きさであるにもかかわらず、人口は 470 万人にすぎない。

飛行機がジャングルの中へ不時着するかと錯覚するようところに「プカン・バル(Pekan Baru)」がある。スマトラ島の中央であるが、海拔は 6m で河港がある。水量の多いシアク(Siak) 河は海岸から 160 km 遡上した内陸部でも 5 千トンの船の航行が可能である。町の名「Pekan(市場)Baru(新)」のごとく河港の交易の町である。シアク河の通商を支配するシアク王国(→258)の拠点として栄えた。

19 世紀後半以来、西スマトラのコーヒーや石炭の物産をマラッカ海峡側に運ぶ中継基地が町の起源である。今日もスマトラン・ハイウェイ(→845)が西スマトラ州からプカン・バルに通じおり、物

<sup>11</sup> コトパンジャンはミナン語表現、インドネシア語ではコトパンジャンという。ダムによる水没補償に不満のある住民の活動が続いている。新潟大学の鷺見一夫教授がコトパンジャンを日本の ODA 諸問題のショーウィンドウと指摘し日本の NGO により住民の支援活動が行われ、2002 年 8 月、住民は日本政府を相手取って賠償請求の訴訟を起こした。

流の拠点である。

このプカン・バルがジャングルの中の交易地としては不釣り合いに大きいのは石油の町のためである。急速に発展し人口1万人(1946年)から現在21万人(1986年)にまで増加した。人口構成はムラユ人、ミナンカバウ人、バタック人、ジャワ人、華人と特定の民族に偏らないコスモポリスである。

今日のプカン・バルはリアウ州の州都として河港の旧市街の郊外に計画的に建設された官庁街である。新市街は街全体が小奇麗である。石油の富が染み渡ったようにゆったりとして裕福な感じがする。心なしかジャカルタと比べると人の眼も穏やかな感じである。

インドネシアの石油生産の拠点は第二次大戦前の南スマトラ州のパレンバン周辺からリアウ州に移った。リアウ州の最も代表的なミナス油田はインドネシア最大の油田であり、世界でも有数の規模である。

ミナス油田をはじめこの地域に広く利権を持つカルテックス社 CPI(→535)はインドネシアの欧米企業の国有化(→475)の際にも踏み留まった会社である。ミナス油田に恵まれた CPI はプカン・バルの町づくりのスポンサーであり、学校からスポーツ・スタジアムまで社会還元を努めている。

郊外のルンバイ (Rumbai) に CPI の従業員の居住する区域がある。そこには西洋風の住宅が整然と並んでおりインドネシアにありながら別世界である。インドネシア人と白人と一緒にスポーツをしている。広大な敷地はフェンスで囲われており入口を固めるガードマンの検問を受けないと入れない。現代に残る“租界”ではないか。

CPI のような米国の大企業の海外進出には地元と同化という考えは微塵もないように見える。米国のカルチャーをそのまま持ってきて現地に移植する。下手な同化策を<sup>あつれき</sup>図るより現地との軋轢はむしろ少ないという経験則に基づく割りきりだろうか。

## 092. ミナス油田

プカン・バルからマラッカ海峡に面するデュマイ港まで 250 km である。地図で見るとスワンプ(→007)を示す低地マークのついた緑の中の真っ直ぐな道である。しかし、実際はヘアピンカーブの山越えもある。道路がよく交通渋滞はあるはずがないが、片道3時間のドライブはぐったりとする。

低い丘の続くところでは地図どおり真っ直ぐな道であるが、上がったたり下がったりする様子はさながらジェットコースターである。道路が丘の上の時、見晴らしがよくなる。はるか地平線の彼方にまで見えるジャングルの低い山並が大きな波のようになって見渡す限り広がっている。

この道路の沿線が油田地帯である。【最初の井戸】と称する看板が道路わきにある。アメリカ映画でなじみのドンキーといわれる汲み上げポンプが動いている。この型の人目をひく大きな装置は今では使われていないが、旅行者の記念写真撮影用に特別に保存されているようである。

方々の井戸から集められた石油は道路わきに並行して敷設されているパイプで積み出し港のデュマイまで送られる。日本ではミナス原油は高流動点油のためパイプの周りを断熱材で保温をするが、熱帯の地ではそのような装置は不要である。ただし太陽熱の吸収のためか、塗料の節約のためか、黒の塗装はコールタールのようなようである。

そもそもこのパイプラインは太平洋戦争中に日本軍が油田の開発<sup>12</sup>のため資材と労働力を総動員して突貫工事を行って完成した。原住民のサカイ族(→566)の反乱を押さえながら工事を強行したが、石油が実際に積み出される前に太平洋戦争は終結したといういわく付きのものである。

類似の挿話を一つ。日本軍は西スマトラ州のオンビリン (Ombilin) 炭鉱の石炭を島のマラッカ海峡側に運ぶため、プカン・バルまで 220km の鉄道を建設した。ロームシャ(→305)や連合軍捕虜を酷使して 1945 年 8 月 15 日に竣工した。石炭は一度も運ばれず、敗残の日本軍の集結に使用されただけで廃線となった。現在、この線路は跡形<sup>13</sup>もない。

第二次大戦後、カルテックス社 CPI はヘリコプターを動員して石油開発を進め、並行して石油輸送のためパイプを敷設した。パイプ沿いに道路は油田資材輸送のためであるが、国道として一般に解放された。従って走っている車の多くは石油会社【C P I】のマーク入りである。

油田の中の道であるから当初は原油を流して道を固めたということである。今でも石油の副産物であるアスファルトを惜しげもなく使っている。クーラーのため閉めきった車の中まで石油の臭いがただよってくる“オイルロード”である。

石油発見以前からあると見える落ち着いた雰囲気のある農家もある。このあたりの人家の前の石油パイプラインの上に乾してある餅<sup>もち</sup>のようなものはタピオカ(→560)らしい。近代産業との奇妙な併存である。⇒535.カルテックス社、547 低硫黄原油

### 093. 石油のデュマイ港

ジャングルの中から忽然<sup>こつぜん</sup>として周りの景色と調和しない異質な石油タンクの光る近代工場の風景が現われる。ミナス油田からのパイプの終点のデュマイ (Dumai) はマラッカ海峡に面する港町である。石油ターミナルにプルタミナ(→531)の石油精製工場 (15 万 bd) がある。

デュマイ港といっても岸に平行してバースが並ぶだけであるが、港の前面には島があり水路も狭い。水深も十分でないので絶えず浚渫しなければならぬ。大型タンカーは旋回も不自由である。こうしたことからデュマイ港に入港可能なタンカーは 10 万トン級であり、中東航路の 20 万トン級以上と比べると小さい。

CPI(→535)とプルタミナの整然とした石油施設の区画の外にデュマイの町がある。船員相手の仮設のようなベニヤ板作りの店舗が西部劇の新開地よろしく並んでいる。保税地区ということで流通経路はよく解らないが中国製の陶磁器が安い。

かつてデュマイはマレー人(→605)の住む半農半漁の寂しい村であった。マングローブ(→006)とジャングルが隙間なく続くこの近辺の沿岸では、デュマイは人間がかろうじてとっかかりを持つ唯一の個所である。デュマイが石油積出港になった所以であろう。

<sup>12</sup> カルテックス社は第二次世界大戦前に油田を発見し、開発の準備中に戦争の勃発となり、技術陣は引き上げた。侵攻した日本軍は日本人技術者を動員して石油開発に成功した。日本の石油開発の実績が北スマトラ石油開発の技術陣に引き継がれた。日本の技術陣はジャングルの中を這いずり回って石油開発を行ったが、後にカルテックスはヘリコプターを動員した。機動力の差は歴然としている。

<sup>13</sup> 西スマトラ州オリンピ炭鉱の石炭をマラッカ海峡側に運送する計画はオランダ植民地政庁側にもあったが、難工事のため断念したものを占領中の日本軍が着手した。労働力として大量のロームシャがジャワ島から動員され、リアウ州ログス(Logas)近辺は難工事であり、過酷な環境と日本軍の圧政のため多くの犠牲者をだした。A.ダムフリ著「Telaga Darah(血の池)」にその間の状況が記されている。⇒加藤剛「時間の旅、空間の旅」1996 メコン

石油製品のうちガソリンや灯油などは小型タンカーで国内や近隣諸国に運ばれる。井戸からそのままの原油は大型タンカーでほとんどは日本向けである。デュマイ港から約 10 日で日本に着く。石油扱量の減少に備えて、一般港への転進のため新バースも建設された。

デュマイ港のもう一つの存在意味は国境の港である。マラッカ海峡の最狭部になるため、対岸のマラッカ港に渡るフェリーが出る。約 40km、3 時間の船旅である。マレーシアに出稼ぎに行く人は延々と長距離バスを乗り継いでデュマイ港まで来て、ここからマレーシアへ船で渡る。これが最も交通費が安い出国である。外国へ向かう国際港であるが、港の雰囲気は瀬戸内に数多くある船着場とそれほど変らなかった。

ところでインドネシア人が海外に出る場合は出国税がかかる。ジャカルタから飛行機だと飛行機代に税金 100 万ルピア（外国人の場合）を払わねばならない。船であると出国税の方も 50 万ルピアと安く設定してある。<sup>14</sup>

ちなみに入出国手続きであるが、日本人が空路でシンガポール入国の場合の手続きは驚くばかり簡単である。しかし船でバタム島(→536)からシンガポールへ入国した際には外国人としてインドネシア人の列に並んだが、同じ国かと思うほど検査が厳しかった。

スハルト政権の末期にマラッカ架橋なるプロジェクト(→034)を大統領の次女ティティ(→452)が打ち出した。具体的な地点については明かにしなかったが、デュマイ近辺の島でならざるをえないことは地図を見ればあきらかである。

そのココロはスハルト・ファミリーに土地を献上すれば橋をつけてやるということらしかったが、その後いかが相成り候や。

## 094. リアウ諸島

1511 年、マレー半島にあったマラッカ王国(→032)がポルトガル(→270)によって滅ぼされた時、王国の残党はマレー半島先端のジョホール (Johor) に逃れて勢力を保った。ジョホール王国はリアウ諸島に拡散しリアウ・リング王国やビンタン王国を名乗った。オランダ・イギリスの勢力が増すに従い、交易から駆逐された王国の生業は海賊まがいであったが、マラッカ王国の栄光を引き継ぐムラユ世界がこの海域を中心に展開していた。

リアウ (Riau) 州はスマトラ島の中央部に位置し、しかも日本の 1/3 の広大な面積を占める。マレー半島の先端から南シナ海に広がるナツナ諸島(→040)もリアウ諸島である。本土に島々が付随しているように見えるが、歴史上の経緯は逆である。島に陣取るリアウ王国の覇権がスマトラ島本土に及んでいたということである。州都も当初はビンタン島のタンジュン・ピナンにあったが、石油が発見されスマトラ島本島の石油の位置づけが高くなり、1958 年にプカン・バルに移転した。

本来はシンガポール島も無数にあるリアウ諸島の一つである。英国のラッフルズ(→338)がシンガポール島を強奪し、既成事実としてオランダに事後承諾を迫った際に、英国領はシンガポール島に限定した。このためシンガポールの目の前のリアウ諸島はオランダ領として残り、後にインドネシアに引き継がれた。

<sup>14</sup> <編者註>2011 年 1 月 1 日から廃止された

リアウ諸島はシンガポール海峡(→035)に面し、シンガポール、マレーシアに接する地政学的に重要な地域である。リアウ州は資源保有州(→438)として対中央(ジャカルタ)の問題があるが、もう一つリアウ州内の〈リアウ諸島〉対〈スマトラ本島部〉という問題があった。

リアウ諸島の住民は支配層には移住してきたブギス人(→617)の血も濃いだが、基本的には沿岸マレー人であり、移住民が多くなったスマトラ本島と異なる。シンガポールという大スポンサーが近くにおれば土砂さえ輸出して金になる。

バタム島開発(→536)という国家プロジェクトもあり、ナトゥナ(→040)の天然ガス資源もあり、リアウ諸島の経済基盤は恵まれている。ミナンカバウ人(→609)やジャワ人の牛耳るプカン・バルへの違和感があったのだろう。

スハルト政権崩壊後、州の分離が容易(→371)になり、リアウ諸島州も31番目の新しい州としてリアウ州から2002年9月に分離独立した。

リング(Lingga)諸島はリアウ諸島の南にある。ジャカルタからプカン・バルへの飛行機の窓から眼下に見たリング諸島の光景は思いがけないものであった。島々の背骨の岩石が同方向に並列して透明の海の中に続いている。海面下の岩も一目瞭然である。海上の船からは単なる島にしか見えないであろう。平面的な地図からも読み取れない自然の造形美が飛行機からのみ眺められた。

海の底まで透き通るような海水に浮かぶ緑に覆われた島々を見ていて『客船ブラックシー応答なし』という早川文庫の小説<sup>15</sup>を思い出した。

## 095. ビンタン島

リアウ諸島の中心である「ビンタン(Bintan)島」はシンガポール海峡を隔ててシンガポールと向かいあう。国境はあるが、フェリーで1時間内の距離であることから大都市近郊型果樹農園や養鶏場などが見られる。

西隣のバタム島ではインドネシアとシンガポールの共同でバタム島開発(→536)が進められ、続いてバタム島の東隣のビンタン島開発が着手された。工業団地を造成して企業を誘致しようとするものであるが、ネックは水の確保である。

シンガポールからの観光客のためにトリコラ(Trikora)ビーチにホテルも増えた。マレー文化あふれるタンジュン・ピナン(Tanjung Pinang)を買物客が散策している。売り出し中の観光スポットはマングローブ観光である。地の利を活かしてハワイを上回るリゾート地計画がサリム財閥(→523)によって進行していたが、一族の逃亡で中断された。

ビンタン島はリアウ諸島の最大の島であり、海峡の要衝の地であることから海賊の根拠地であった。マラッカ王国がポルトガルに占領されて王国はジョホールに引越してきたが、ビンタン島に拠ったリアウ王国も勢力を伸ばした。

マラッカ海峡をめぐるオランダ、英国、アチェ王国、ジョホール王国、リアウ王国の覇権争いの中

<sup>15</sup> シンガポールを出航したソ連の豪華客船がハイジャックされ行方不明になるというストーリーである。マラッカ海峡をめぐる民族政治問題が背景となっている。客船はある小島の崖の側に係留され、崖の際にせまる緑に覆われた中に隠されて飛行機からの偵察を逃れる。小説の虚構も現実も区別がつかなくなる不思議な光景であった。

で、次第にヨーロッパ勢が優位にたち、リアウ王国は英国にシンガポール島を割譲<sup>かつじょう</sup>させられた。年金と引き換えに通商（海賊行為と紛らわしい）も禁じられ、以降のリアウ王国はイスラム教と文化に専念しマレー文化のセンターとなった。

そもそもリアウ王国には文化<sup>16</sup>の伝統があり、18世紀のラジャ・ハジ（RajaHaji1725-84）は『マレー史』を編纂した。孫のラジャ・アリ・ハジ(RajaAliHaji)はマレー語史と文法の辞書を編纂した。インドネシア語の基となるリアウ・マレー語(→606)の老家である。

ビンタン島のタンジュン・ピナンの鼻の先にあるプニュンガット (Penyngat) 島という直径 1 km、周囲 2 km の小島がリアウ王国の“奥の院”である。1911年にオランダの圧力でリアウ国王はシンガポールへ亡命を余儀なくされたが、

島にはラジャ（領主）の歴代の墓があり、モスク、王の館がある。中世マレーがそのまま凍結されている。ジャワ文化がクラトン(→121)で培養されたがごとくマレー文化はプニュンガット島で培養された。

リアウ諸島のガララン (Galang) 島とレンバン (Rempang) 島日本人にとって怨念<sup>おんねん</sup>の島である。地図で探し当てるとビンタン島の西方にある。緑が少なく赤土の剥き出しの島である。最近、地域開発のためバタム島から橋が架けられた。

第二次世界大戦後インドネシアに多くの日本兵がいたが、進駐してきた英国軍によってこの2島に収容<sup>17</sup>された。独立戦争の最中に日本兵をインドネシアから引き離しておくことは日本兵への安全配慮のようであるが、不毛の島に自給自足で餓えさせるという日本への陰険な復讐であった。ソ連が日本兵にシベリアで行った仕打ちの陰に隠れているが、英国の日本兵に対する仕打ちも銘記されねばならない。

## 096. インド洋上のニアス島

スマトラ島に並行してインド洋に浮かぶニアス諸島、ムンタウェイ諸島(→657)がある。「ニアス (Nias) 島」は京都府ぐらいの大きさをスマトラ本島シボルガ<sup>18</sup>から 100 km 離れているにすぎない。しかし近寄りやすい地形、そこに住む首狩り(→625)の野蛮な風習の民族の存在はこの島を隔離した状態に保って近年に至った。

ニアス族はプロト・マレー人(→565)で石の文化、成人式の走り高跳び、船型家屋など固有の個性ある文化で知られている。インド文化やイスラム文化を受ける前のインドネシアの原文化がニアス島で純粋培養されている。言語学的にはオーストロネシア語群(→563)であるが、スマトラ島の民族の言葉との関連は少なく、むしろスラウェシ島の民族との言語、ポリネシアの言葉との関連も指摘されている。

<sup>16</sup> リアウ王国にはスラウェシ島から移住してきたブギス人が王統に割り込み、副王のポストを引き継ぎ権勢をふるった。ビンタン島のマレー文化はピュアーなマレー文化ではなくブギス文化とのハイブリッドである。ブギス人の王はマレーに同化するためマレー文化の護持者になることに努めた。→広末雅士「東南アジアの港市世界」2004 岩波書店

<sup>17</sup> ガラン島、レンバン島は島という名の牢獄である。第一次世界大戦の折、ドイツ軍捕虜が収容され 3000 人の餓死者を出した。日本兵も食料不足に苦しめられた。“餓乱島”、“恋飯島”という命名に日本兵の置かれた状況が示されている。その後、ガララン島はベトナム難民の収容所になっていたが、現在は誰が収容されているのだろうか。

<sup>18</sup> ニアス島への渡航港であるシボルガ(Sibolga)はスマトラ島西岸の有数の港である。シボルガも美しい砂浜の観光地である。スマトラ島東岸は泥海で観光ビーチはない。



島の文化は北部、中部、南部で異なっており、また、村々が固有の文化を保持しており、相互に首狩りを行う敵対関係であり、島全体の統一政権はなかった。

ニアス族の社会構造は貴族と平民からなる身分社会であり、最下層に奴隷がいた。厳しい身分社会であり、奴隷は人の扱いを受けない、村の中にさえ住めないという差別である。ニアス島の支配者にとって奴隷は家畜並みの意識しかなく外国の商人に島の住民である奴隷を平気で売り飛ばした。ヨーロッパ人がニアス島に近づくようになったのは奴隷入手のためである。

英国のスマトラ島の拠点であるブンクル在任中にラッフルズ(→338)は奴隷貿易を止めさせるためニアス島へ調査団を派遣したが、首狩り族への学問的好奇心もあったであろう。ラッフルズは『スマトラ誌』を著述したが、出版のためブンクルで船積みされた原稿は船火事で消失する不運にあった。もし焼けなかったならば『ジャワ誌(→969)』に匹敵する『スマトラ誌』にニアス島のどのような記述があったであろうか。

当初は奴隷貿易で続いてキリスト教宣教師の布教活動によって外部文明と接触するようになり、ニアスの伝統文化は急速に失われた。ニアス文化の活力がなくなったのは、キリスト教の布教と外来統治権力の法令で儀式に必要な人の頭の採取が禁止されたからである。

“石の文化”といわれる石造の構築物も新たに作られることもない。屋根のみならず居住部分を含めての船型の高床式住宅も少なくなった。今のニアス島は観光客に伝統文化の残骸を見せ物にするのが生業となっている。

民族文化面で非常に興味のある島であるが、ニアス島を訪れる観光客はサーファーが多い。インド洋から押し寄せる波は島の近くで大陸棚のためにうねりが高くなり、6 mの高さの波が押し寄せる。世界有数のサーフィンの適地であるとのことである。

2004年12月のスマトラ島沖地震(→228ex)に続き、ニアス島で2005年3月にM8.7の大地震があり、「ニアス島地震」と名づけられた。スマトラ沖地震と同じプレートの接点に起因の大地震である。

⇒920.ニアス島の走り高跳び

## 097. 西スマトラ州

スマトラ島中央のインド洋側にある西スマトラ州の本拠はダラット(Darat)といわれるバリサン山中にある。パダン高原ともいわれるダラットにはマラピ(Marapi 2891m)山、シンガラン(Singalang 2897m)山の煙たなびく活火山がある。マニンジャウ湖とシンカラック湖のカルデラ湖の澄んだ水を渡る風は赤道直下でも爽やかである。風光明媚な景色にミナンカバウ風の個性ある伝統建築を配すれば素人でも素晴らしい写真がとれる。

ダラットは火山性の豊かな土壌に恵まれた農業や金の産出地であったことから経済活動が盛んであり、進取的な住民の気質を涵養してきた。アガム盆地、タナダタル(Tanah datar)盆地、リマプルコタ(Limapuluh kota)盆地にはミナンカバウ人が居住しており、ミナンカバウ文化を育ててきた。

ミナンカバウ人は母系社会(→610)という世界でも特異な社会形態で知られている。かつまたミナンカバウ人は熱心なイスラム教徒である。母系社会と父権性の強いイスラム教の併存は奇妙な現象であるが、アダット(→588)が優先することでなんとか折り合いをつけている。

ミナンカバウ人は誇り高い民族で祖先はアレキサンダー大王(→944)という民族伝説はとにかくとしても、ムラユ人(マレー人)他スマトラの諸民族の宗家に位置づけられている。

オランダの植民地支配に対する民族抵抗戦争であるパドゥリ戦争(→278)においてミナンカバウ人はオランダを苦しめたが、時は下ってインドネシア独立の民族主義運動においても主導的役割を果たした。

ミナンカバウ人の進出先は政治、経済、文化などあらゆる方面の知識階級の人材も輩出しており、特に文学、ジャーナリストの分野では突出している。

「パダン(Padang)市」はスマトラ島のインド洋側の最大の港である。パダンの語義は「平地」の意味であるが、町の後ろはバリサン山脈が迫っている。植民地時代に鉄道と道路が建設されてからスマトラ島の豊かな産物を積み出すために急速に発展した。現在のパダンはスマトラ島第三の人口を有する商工都市であり、西スマトラ州の州都である。

インドネシアの都市中央の商店街に櫛比する華人の店<sup>しつぽ</sup>はパダンにも存在するが、ミナンカバウ人の前では影が薄いようで喫茶店が目立つ程度である。

パダンには西スマトラ州博物館があり海のリゾート地もあるが、ミナンカバウ人の故郷であるダラットへの入口に位置する。沿岸から道路でも鉄道でもパダン高原にいたる90kmの行程は海岸から高地へのつづら折りの道であるが、海、山、川が織り成す景色はすばらしい。

途中のパダン・パンジャン(Padang Panjang)はミナンカバウの伝統家屋(→938)が保存されている。パガルユン(→259)にはかつて存在した王宮が復元されている。

⇒609.ミナンカバウ人

## 098. ブキティンギ市

ダラットのアガム(Agam)盆地はミナンカバウ人(→609)の故郷である。このアガム盆地にある美しい町が「ブキティンギ(Bukittinggi)」である。町を見下ろす小高いブンド・カンドゥン公園<sup>19</sup>の時計台は全インドネシア人によって共有されている心象風景である。人口8万人の小さな町であるにもかかわらずインドネシア人の心に刻まれた町である。

ミナンカバウ人は多くの文学者や詩人を輩出しており、ブキティンギの記述は多い。その中でハッタ(→443)は『回想録』の冒頭で自分の生地を次のように記している。

ブキティンギはアガム高地の中央部にある小さな町だ。マラピ山とシンガラン山の麓の突端にある町で、北側を取り囲んでいるブキット・バリサン山脈の支脈が見える。ここからかなり離れているが、東の方角にサゴ山が見える。霞がない時には金が出る山として伝説で有名なパサマン山がはるか遠く北西に遠望できる。溪谷と山脈、周囲に見えるブキット・バリサン山脈はブキティンギの町の景色をととても美しいものにしている。この気候は涼し

<sup>19</sup> ブンド・カンドゥン(Bundo Kaunduang)はミナンカバウ語で“偉大なる母”という意味である。ミナンカバウ人の母系社会を象徴する言葉である。

く夜は寒いほどだ。色々な草花があちこちに咲き乱れている。海岸地帯から観光に来る人たちはよくここを“バラ園の町”と呼んでいた。

ブキティンギはインドネシア共和国臨時政府の仮首都であったことがある。独立戦争当時の 1948 年 12 月 19 日、オランダはインドネシア共和国の首都のジョグジャカルタを飛行機でもって急襲し、スカルノ大統領とハッタ副大統領を拉致(→327)した。談判を一挙にけりをつけようというオランダ側のあせりである。

しかしスカルノとハッタは捕えられる前にブキティンギにいるシャフルディン・プラウィラヌガラ(→378)に臨時政府を樹立して中央政府を引き継ぐように電報で指示していた。従ってオランダが捕えたスカルノとハッタは正副大統領の権限は委譲しており、インドネシアの統治権の権限がないと主張しオランダとの交渉を拒否した。

オランダはブキティンギの非常時内閣との交渉の手掛かりもなかった。オランダの採った強引な手段は国際的な非難を受け、結局スカルノとハッタを釈放せざるをえなかった。半年余りでインドネシアの主権はブキティンギからジョグジャカルタに返還された。

1958 年にスマトラ島の反乱(プルメスタ(→378)ともいう)でブキティンギにインドネシア共和国革命政府が樹立された。この際もシャフルディン・プラウィラヌガラが首相であった。

ブキティンギ郊外のセマンガ地溝(→028)の断層の崖に日本が占領時に築いた防空壕の跡がある。ここでロームシャ(→305)3000 人が虐殺された、というレリーフがあった。西欧人観光客目当ての名所作りのつもりだったが、事実無根であるという日本側の抗議で撤去された。

コタガダン(Kota Gadang)は小さな村であるが、ミナン人の秀才を輩出したことで名高い<sup>20</sup>。現在も人は住んでいるが、近辺からの留守番だそうである。

## 099. ブンクル州

スマトラ西岸の「ブンクル(Bengkulu)州」の人口は 120 万人、面積は 21 千 k m<sup>2</sup>、山地が多く貧しい州である。州都のブンクルもこれという特徴のない普通の町である。ブンクル州はルジャン(Rejang)族が多いが、ブンクル市はマレー人が多い。

ブンクルの特記されるのは歴史である。英国はオランダとの香料交易支配をめぐる戦争で敗れてアンボン港、バンテン港、バタビア港から追い出(→273)された。代わりにスマトラ島の西岸に 1695 年に設けた交易拠点がブンクルである。

1824 年の英蘭協定でマラッカと交換されるまでブンクルだけが英国のインドネシア地域における唯一の拠点であった。ブンクルにおけるラッフルズ副総督の活躍は別項(→338)に記している。ちなみにラッフルズはブンクルで三人の子供を全て病気で亡くしている。健康に良い土地とは思われない。

ブンクルの英国時代をしのぼせる建造物に 1719 年に建設されたマルボロ(Marlborough)要塞がある。港を見下ろす要塞は最近までインドネシア軍に使用されていた。

ブンクルの歴史上のもう一つのエピソードは初代大統領のスカルノ(→439)である。オランダからの

<sup>20</sup> <編者註>この町の人たちはオランダの片棒を担いだ人たちといわれている。

解放を求める民族主義運動のため、捕らえられて流刑中のスカルノは 1938 年ブンクルに移された。スカルノがフロレス島のエンデ(→218)でマラリアに罹患したために、憂慮する民族主義者を宥めるためである。

数少ないブンクルの観光スポットとして当時のスカルノの住居が公開されている。後に述べる女生徒をストーカーしていた自転車もある。軟禁であるから市内を歩き回る自由はあり、流刑中のスカルノはモスクの設計を行なった。市内のジャミック (Djamik) モスクがその作品である。スカルノの本職は ITB(→108)出身の建築技師である。

時間つぶしに教師もしており、生徒の中の目立つ女生徒がファトマワティ(→442)である。彼女は 30 台後半の既婚の教師に迫られて結婚した。独立宣言、独立戦争当時の大統領夫人で「イブ・ヌガラ Ibu negara (国母)」といわれ、後のメガワティ大統領(→456)の母である。バンドゥンから苦楽をともにしてきた糟糠の妻(→442)は身を引いた。

独立運動の闘士スカルノは逮捕、釈放を繰り返し通年 10 年に達した。そしてその最後の流刑地がブンクルであった。太平洋戦争の勃発で 1942 年に日本が攻めてきた時、オランダはスカルノを連れてオーストラリアへ逃げるため陸路パダンに向かった。しかし混乱の中でスカルノはどさくさに紛れて脱走し、やがて日本軍に迎えられてジャカルタへ行き、3 年後に独立を達成した。

オランダはスカルノを釈放したのではない、スカルノにかまう余裕もなく遁走した。そのスカルノを迎えにきたのは日本である。歴史において“もし”の空想であるが、もしオランダがスカルノを連れてブンクルからの逃走に成功したならばインドネシアはどのような独立の歴史を歩んだであろうか。

## 100. バタン・ハリ河流域

「バタン・ハリ (Batang Hari) 河」は全長 800km あり、スマトラ島最長の河である。ジャンビ (Jambi) 州の州都ジャンビ (Jambi) はバタン・ハリ河が丘陵地から低地に流れる丘陵の東端にある。河口からは遡った所になるが、外洋船が着岸できる河港である。



ムアラジャンビにて編者  
2012/2/19

上流のプルパット地域はかつて産金地帯であった。ジャンビ近辺から中国の陶磁器の遺物が発見されており、東西貿易の拠点であったことがわかる。ジャンビは昔から地域の中心地である。付近にムラユ (Melayu) 王国(→258)があったが、7 世紀後半にスリウィジャヤ王国(→255)に破れ属国になっただろう。

ジャンビから 20km のバタン・ハリ河に沿いにある「ムアラ・ジャンビ (Muara Jambi)」はスマトラ島最大の仏教遺跡である。湿地の中

中の煉瓦遺跡は 12～13 世紀に栄えた三仏齊王都の跡とされている。チャンディの一群が発掘調査中であるが、チャンディ・ティンギは 150m 四方の寺苑の中央に三段の壇があり、頂点にストーパーがあったと推定されている。さらに上流のスンガイ・ランサットからは仏像が出土した。シンガサ

リ王国のクルタナガラ王(→246)がムラユ王国に送ったものらしい。

仏教を奉じるムラユ王国は姿を消すが、伝説によればテラナイ (Telanai) 王子は生まれてくる息子は国に災いをもたらすとすの予言に怯え生まれたばかりの息子を海に流す。流れ着いたシャムで成人になった王子はジャンビを攻めて父を殺し、町を破壊して王国は滅亡した。

16 世紀になってジャンビにマレー人のイスラム王国が復活し胡椒の集散地として栄え、VOC(→272)の商館も置かれた。しかしジョホール王国やパレンバン王国との勢力争いで疲弊し、1833 年にオランダの軍事力介入に宗主権を認め、1906 年に王国は完全に滅びた。今日の州都は旧ジャンビ市街地の西側に建設された。

河口に広がるスワンプと泥炭からなる低湿地はマレー人(→605)の居住するムラユ世界であった。ジャンビ州にはバンジャル人(→192)、ブギス人(→617)が移住している。ジャワ人の組織的移住もあり、インドネシアの色々な民族の<sup>るっほ</sup>増殖である。

パダン・ハリ河の源流地のクリンチ (Kerinci) 地方はバリサン山中の盆地は肥沃で人口密度も高い。スンガイプヌ (Sungai penuh) が中心都市である。クリンチ族が水田稲作を営む。行政面からはジャンビ州に属するが、距離的關係から経済的にも文化的にも隣接する西スマトラのミナンカバウ人(→609)との繋がりが深い。ミナン人と同じ母系社会(→610)とイスラム教で知られる。

スマトラ島最高峰のクリンチ山 (3805m) は活火山であり、時々爆発するが水蒸気爆発程度で収まっている。山頂の火口には黄緑の水が溜まっている。一帯は国立公園に指定されており、野生動物の保護も行われている。気候は乾燥し、さわやかで風光明媚である。カルデラ湖や温泉があり、バリサン山中のリゾート地になる条件を備えている。

## 101. ムシ河流域

スマトラ島の西側に脊梁山脈であるバリサン山脈が通っているため、主要河川は山脈から東に流れる。スマトラ南部の島の膨らみが最大の所に「ムシ (Musi) 河」がある。長さ 520km あり南スマトラ州を横断して東流する。

水源地のデンポ山 (Dempo3159m) はセマンカ地溝帯(→028)の中央に噴出した規模の大きい火山である。秀麗な形から日本人は「スマトラ富士」とよんでいる。マレー人(→605)の皇祖が降臨したとの伝説のある聖なる山(→025)である。

デンポ山麓に広がる海拔約千メートルのパスマ (Pasemah) 高原は地味豊かな地である。ラッフルズ(→338)がブンクルにいた頃、パスマ高原を訪れて“桃源郷”に来たようだと感激した。高原には先史時代の古い石造物の遺跡(→700)が散在しており、早くから文化が栄えたことをしのばせる。墳墓とおもわれる石造物の内部は絵画が施されている。

パスマ高原にある標高 710m のパガララム (Pagaralam) は植民地時代にパレンバンの石油工場の白人従業員のために拓かれた避暑地であり、果物、野菜が豊富である。現在ではインドネシア有数の紅茶とコーヒーの産地である。農園の従業員はジャワ島からの移住民が多い。

ラナウ (Ranau) 湖はラナウ火山のカルデラ湖である。外輪山スミヌング (Seminung1891m) 山が高い。パスマ高原の支流と、南からからのスミヌング山の支流を集めてムシ河になり、東に下りジ

ジャワ海にいたる。

かつて7世紀頃に栄えたスリウィジャヤ王国は「ナガ(→953)のパトロンとして7つの頭の蛇を司どった」とある。7つの頭とはムシ河の支流の数とされている。ムシ河口の王国は8世紀頃まで南海貿易の中心地として王国は全盛を誇った。交易国家としてスリウィジャヤの名は中国、インドの歴史に残されている。

唐代に義浄という僧がインドへの往復の途中スリウィジャヤ王国の地に数年間滞在している。その記録によれば王国では大乘仏教が信仰され、1千人の僧がいるという繁栄ぶりであった。また歴史書にはジャワ島のサイレントラ王国(→243)の王子がスリウィジャヤ王国を受け継ぐようなことが記されている。同じ仏教を信仰するサイレントラ王国とスリウィジャヤ王国は同族の関係であったらしい。

スリウィジャヤ王国の所在地は現在のパレンバン市街地の少し上流の湾曲部と見られている。標高25mのブキ・シグンタン(Bukit Siguntang)<sup>21</sup>という小高い丘が王国の先祖が降臨した聖地と推測されている。大帝国の所在地<sup>22</sup>としては意外に貧弱な感は否めない。ちなみにデンポ山もブキ・シグンタンといわれる。

パレンバンのあるムシ河はマラッカ海峡とスンダ海峡の間になり、両方をにらむ要衝の地である。昔からムシ河上流で砂金が採取された。今日も流域の富が河口のパレンバンに集積される豊穡の河である。⇒255.スリウィジャヤ王国

## 102. パレンバン市

「パレンバン(Palembang)市」はムシ河の河口にある人口百万人を越える大都市である。スマトラ島ではメダン市に続く2番目の、全インドネシアでも6番目の大都会であり、南スマトラ州の州都である。

今でこそムシ河を50km遡ったところにあるが、海拔は2mにすぎない。長年の土砂の堆積によるもので昔はもっと海に近かったものであろう。ムシ川はパレンバン市内でも河幅700m、水深19mもあり外航船も航行できる。

町で最も目立つ建造物は河を横断する橋である。アムペラ(Ampera)橋<sup>23</sup>は日本の戦時賠償(→362)で1964年に完成した。大型船舶の通行の際は橋の中央が開く。河の北岸の橋の下では“パサール16”という水上市場が午前中は賑わう。

パレンバンは南スマトラの政治、経済、文化の中心地として流域の広いムシ河の河口にあり、流域を支配する商業都市である。特に石炭、プランテーション農産物の集散地であり、石油精製、肥料工場などの産業で活気がある。

<sup>21</sup> ブキット・シグンタンの名はインドネシア人に神秘的な響きがある。アブドゥル・ハリク(Abdul Halik)の率いるムラユ楽団ブキット・シグタン(Orkes Melayu Bukit Singtang)と名乗るボーカル・グループが1950年代に人気をえた。

<sup>22</sup> <編者註>スリウィジャヤの都はパレンバンではなく、マレー半島にあったと研究家の鈴木俊氏は主張している。

<sup>23</sup> 橋名のアムペラ(Ampera)はAmanat Penderitaan Rakyat(人民の苦悩)のシンカタンであり、スカルノ大統領時代のスローガンであった。

産業のうち特筆されるのは石油(→547)である。今世紀初頭より南スマトラで石油が発見され、パレンバンはその拠点であった。石油を渴望する日本(→298)は太平洋戦争に突入し、その狙いはパレンバンの占領であった。

当時、パレンバンにはムシ河沿いに NKPM (米国のスタンダード系) と BPM (英蘭のシェル系) の 8 万 B/D の石油精製工場があった。今日の石油精製工場の規模と比べると小規模であるが、当時の日本の石油精製工場の合計は 9 万 B/D にすぎなかったことから日本にとっては垂涎<sup>すいぜん</sup>の要衝であった。

1942 年 2 月 14 日、339 名の日本陸軍落下傘部隊の降下による奇襲は“空の神兵”としてもはやされたが、死傷者は 1/4 にもなり犠牲も大きかった。

米系の NKPM は予め用意されていたマニュアルどおり製油所を破壊して従業員は逃亡した。BPM も日本の攻撃を予想して爆破の手順は定めてあった。しかし本国はナチ占領下にあり逃げて帰る所のないオランダ人には製油所の破壊にはためらいがあったのだろうか、その躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>に現地従業員の不服従のサボタージュがあり、破壊工作は失敗した。

この結果、日本はほとんど無傷で BPM の製油所を手に入れた。しかし皮肉なことには数日後の数機の飛行機による爆撃に対して防御体制ができていなかったのもせつかくの無傷の製油所は無に帰した。

当時はリマウ油田、アバブ油田、ダウス油田、ジャンビ油田から採掘された原油がパイプでパレンバンまで運ばれたが、近年の南スマトラ各油田は枯渇してきた。しかしムシ河の交通の便を活かした製油所は増強されており、依然としてパレンバンは石油の町である。ちょうどパレンバンの上を通る [ジャカルタ⇄シンガポール] 間の飛行機の窓から製油所が河岸に光って見える。製油部門は国有化(→475)されているのでプルタミナの設備である。

### 103. ランプン州

スマトラ島の最南端に位置する「ランプン (Lampung) 州」はジャワ島に対する玄関になる。ジャワ島のメラク (Merak) 港からのフェリーは 2 時間弱で突端のバカウニ (Bakauheni) 港に着く。フェリーは数十分間隔で 24 時間就航している。湾奥のバンドル・ランプン (Bandar Lampung) が州都であり、ここからスマトラ島各方面へのバスが発着する交通の要所である。

ランプン州の名はランプン族 (アブン族などマレー系種族の総称) というスマトラ系の民族の名にちなむ。しかし今日のランプンはすっかり様相を異にしている。ジャカルタから車で 10 時間程度の距離であるためジャワの影響をもろに受け、ジャワ化したスマトラ島である。人口が 20 年間に 2.5 百万人から 6 百万人と 2 倍以上に増えたのは移住民の存在である。ジャワ島に近いオランダ植民地時代からジャワ人が移住していたが、インドネシアになってからはジャワ農民の移住が国の政策として組織的に行われるようになった。

政府の移住政策(→724)ではジャワの農民は移住先で 2 畝の農地を得ることができる。飛行機からジャングルが開拓されて広がる移住先が見える。切り開かれた平地を貫く道があってその道を両側に同区画の仕切が整然と並んでおり、一角には住居らしい点がある。

2 畝の農地は魅力的に見えるが土地の肥沃度や灌漑の不便などからジャワ島のような生産性はあ

がらないため移住民の生活がそれほど上がるわけではない。日本商社による機械化による農園開発プロジェクト(→543)も試みられたが、結局は撤退した。

政策による移住以外に自発意志による移住もあり、これらが累積された結果、ジャワ人は原住民のランブン人を凌駕し、ランブン州の 90%は移住民といわれる。近年ではジャワ島からランブン州への移住は禁止されている。

この結果、ランブン州ではジャワ島の風景の延長である。その代表は稲作である。ジャワ人は稲作に固執し万難を排して米作りを行う。ガムラン(→910)やワヤン(→904)というジャワ文化をそっくり持ち込んでいることはいうまでもない。

村の外見からランブン人とジャワ人の区別は容易である。ランブン人はスマトラ系民族の高床式(→792)であるのに対してジャワ人の住居は土間式(→794)である。

ランブン州には野生象(→068)が生息しており、ウェイ・カムバス (Way Kambas) に保護区が設けられている。インドネシアでは象を家畜にするノウハウがなかったのでタイから調教師を招きカンダサリ (Kandang Sari) 村の象の教育センターでは特訓を行っている。ついでに象にサッカーなどの芸を仕込み観光客が来ることを期待している。

飼いならされた象を連れてきても象にも伝統文化による気質の差があるらしい。教育をするのは3～5歳の若い象が対象で期間も10年近くかかる。象も年老いてからの教育は効果がないらしい。

スハルト政権当時の1980年代にイスラム教過激派住民が虐殺されたというランブン事件<sup>24</sup>があったが、詳細は明らかになっていない。

#### 104. 錫のバンカ諸島

「バンカ (Bangka) 諸島」はバンカ海峡を隔てたムシ河口にある。最大のバンカ島は面積1万1340k m<sup>2</sup>、人口約45万。中心都市は東岸のパンカルピナン(Pangkal pinang)である。全体に丘陵性で最高点は標高692m、気候は高温多湿である。

ブリトゥン (Belitung) 島はバンカ島の東に隣する。面積4600k m<sup>2</sup>、人口約15万。地形は一般に平坦で中央部は標高510mである。

1710年にバンカ島で錫(→550)が発見された。以来、バンカ島を中心にブリトゥン島、シンケプ島を含むバンカ諸島はインドネシアの“錫群島”といわれ、錫年産約2万9000t、世界の産額の10%を占める。

錫鉱はすべて露天掘りのため島の形が変形するほどであった。散在する湖が錫の採掘跡である。現在は国営のタンバン・チマー (Tambang Timah) 社が直営または委託により操業を行っている。高品位の地点は掘り尽くし近年は低品位の砂錫の利用も開発されているが、長年の錫の不況のため活気は失せている。

ももとは半農半漁のマレー人の居住する島であったが、豊富な錫鉱が発見されて以来、華僑が鉱山労働のクーリー(→669)として連れて来られた。最盛期には中国系の人口比率が過半を占めた。今日も1/4は中国系であり、客家系(→672)が多い。

<sup>24</sup> 1989年3月、イスラム教過激派の小グループが軍の佐官を殺害した。その報復として、軍は動員を行い3日間に41人を殺害した。実際の死者は200以上といわれる事件があった。

⇒Michel R.J.Vatikiotis“Indonesian Politics under Suharto 3rd edition”



行政的にはバンカ諸島は南スマトラ州に属していたが、2000年、バンカ県とブリトゥン県は南スマトラ州から分離独立し、新たにバンカ・ブリトゥン州となった。スマトラ本島の南スマトラ州と異なる住民構成が背景にあらう。

バンカ島はジャワ島とスマトラ島の上に位置することから歴史が行き交う中継点であった。バンカ島のコタ・カプール (KotaKapur) で発見された碑文にスリウィジャヤ王国(→255)に従わない者に対する恫喝<sup>どくかつ</sup>を宣言し、ジャワ島に遠征することが記載されている。スリウィジャヤ王国の海外侵攻はバンカ島が拠点であったらしい。

19世紀始めにジャワ島を立ち去った英国のラッフルズ(→338)は捲土重来<sup>けんどちようらい</sup>を期してブンクルに戻り、オランダに対抗する拠点の候補地を物色した。その有力候補地がバンカ島とブリトゥン島であった。ラッフルズを警戒しオランダも島の防衛を強化した。

最終的なラッフルズの選択はシンガポールの地になったが、もし、その際にラッフルズがバンカ島かブリトゥン島に英国の拠点を設けていたならば、その後の東南アジアの歴史はどのように変化したであらうか。

1948年12月19日、独立戦争の最中にスカルノ大統領とハッタ副大統領はオランダの急襲によってジョグジャから拉致(→327)され、トバ湖畔のプラパットを経てバンカ島の鉱山会社の施設に収容された。独立戦争中も錫鉱山はオランダが完全支配していたからであらう。

有刺鉄線で囲まれたゲストハウスへ国連の使者と世界からジャーナリストが訪れたことによって独立戦争は終結に向った。